The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「京都」イメージの形成 : 近代からの新たな展開
Author(s)	山田, 由希代
Citation	デザイン理論. 2001, 40, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52944
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「京都」イメージの形成
── 近代からの新たな展開 ──

山　田　由希代
京都工芸繊維大学

キーワード
京都，美術，案内記，イメージ，明治
Kyoto, fine arts, Guidebook, image, Meiji

はじめに

平安遷都（794）以降，明治維新（1868）まで都として永く伝統を育んできた京都[1]には，他の都市にはない独特なイメージというものがある。

その「京都」イメージとは一般的にどのようなものかを理解するため，それに関するごく簡単な調査を行った[2]。その結果，現代の私たちの「京都」イメージとは，歴史都市としてなかば一般化されていることがわかった[3]。では，この「京都」イメージは，いつ，どのように形成されたのか。その形成時期については，明治28年を起点としていることがすでに指摘されている[4]。幕末維新，東京遷都を経て京都という都市が経験した歴史を「公家社会」を通して具体的に論じた小林氏は，復興のための「京都」の再構築における具体的事業は，第四回内国勧業博覧会と平安建都千百年紀念祭，それに併合した『平安通志』（明治28）の編纂という形に収斂されると述べている。また，文化史の観点から高木氏は，近代に入り岡倉天心の理論によるはじめての歴史認識，そして皇室という二つの側面から，「京都」イメージとは平安時代の「優美」，「雅」な文化と結びつけて創り上げられたと考察している。

これら近代京都の再構築に関する先行研究は，「京都」という都市の創造基盤が「歴史」認識にあり，その契機となった第四回内国勧業博覧会や平安建都千百年紀念祭といった一大行事がとり行われた明治28年（1895）であることに焦点が絞られている。

本稿の目的は，この明治28年を起点として「京都」イメージが形成される過程において，これまで言及されなかった案内記における「美術」[5]という要素の重要性を示すことにある。

以下，まず1では，先行研究の概観をふくめ，京都に対する歴史認識の形成過程を確認する。2では，「京都」の姿を全国に発信するメディアとして利用された地誌を対象として，「京都」のイメージが地誌のなかでどのように形成されているかを検討し，その過程で明治28年の位置を再確認する。そして，3では「京都」における「美術」の位置を再確認することで歴史都市「京都」と「美術」の関係を明らかにしたい。

1　明治28年における歴史認識の萌芽

「京都」イメージとは，明治28年を境に形成されたといわれる。それは，その年に行われた平安遷都千百年紀念祭と明治政府主催の第四回内国勧業博覧会という大きなイベントを通して「京都」という都市の独自性が示されたからである。京都は明治維新による東京遷都で，政治的にはもちろん，経済，文化においても衝撃的な痛手を負っていたので，早い段階から，政府主催の内国勧業博覧会を京都で開催することで都市の活性化をはかろうとしていた[6]。

そして，明治28年，第四回内国勧業博覧会の京都誘致に成功する。その有効な誘致手段が，平安遷都千百年紀念祭であった。そこにおいて全国に向けた歴史都市「京都」というイメージが形成された。つまり，「京都」を特定のイメージをもつ都市として演出することは，東京遷都以降，地方都市化していく京都のアピール方法が模索されたことにはじまるのである。

第四回内国勧業博覧会の誘致を成功させた平安遷都千百年紀念祭は，初の京都の歴史書である『平安通志』[7]の編纂事業も促した。歴史都市「京都」というイメージの形成において，この『平安通志』は重要な役割を果たした。つまり，平安遷都千百年紀念祭および第四回内国勧業博覧会という国をあげてのイベントにちなんで発行することになったのが『平安通志』なのである。『平安通志』は，明治26年4月の提議から2年余りという短い間に歴史家湯本文彦（1843－1921）によってはじめて編纂された京都史である[8]。湯本は，史実に基づいた考証学の立場から体系的に京都の歴史を編纂しようとした[9]。その内容は，平安時代から当代までの間に京都で活躍した人物や遺跡，あるいは，制度，風俗，都の沿革にいたるまでが体系的に編纂されたものである。

『平安通志』の目的とは，第一に平安京の創立者とされる桓武天皇の偉業を強調することであった[10]。したがって，内容比率にも平安時代にかなりの重点がおかれている。平安遷都千百年紀念祭自体，および『平安通志』自体が平安時代という過去を基点とするため，そこから歴史都市「京都」のイメージが打ち出されるのは必然的だといえる。

このように，平安遷都千百年紀念祭とそれにあわせて編纂された京都の歴史書である『平安

通志』[11] といった紀念祭事業を基盤に，第四回内国勧業博覧会へ向けて歴史都市「京都」というイメージが形成されたことについては，すでに指摘されている。それに対して，次章以降で，案内記における「美術」の内容が歴史都市「京都」のイメージ形成に果たした機能に注目していきたい。

2　「美術」の意味

歴史都市「京都」としてのイメージ形成に「美術」が果たした機能を考察するため，ここではまず，明治期に出版された地誌をとりあげる。地誌をとりあげる理由は，その内容がそれぞれ「京都」という共通のテーマで表現されたものであり，また，地誌は明治年間を通して不定期ではあるが相次いで出版されているからである〈表1〉。そのため，地誌のなかでの内容記述や形式の変化がいつごろ生じたのかが読みとりやすいからである[12]。

表1　明治出版の案内記一覧

著者・編者	書　名	出　版	発行年月日	所　蔵
新宮貞亮・編	『京華名勝集』1～5巻	勝村治右衛門	明治3年10月	京都府立総合資料館
K. Yamamoto	『The guide to the celebrated places in Kiyoto & the surrounding places』	Niwa	明治6年（1873）	京都府立総合資料館
村上和光・編	『京都府駅程記』		明治9年4月	国会図書館
福富正水・原著 乙葉宗兵衛・編	『改正各区色分町名京都名所巡記』	村上勘兵衛	明治10年10月10日	京都府立総合資料館
増山守正・編	『明治新選西京繁昌記』		明治10年3月	『新選京都叢書』
菊池　純	『西京伝新記』4冊	内藤半七	明治10年6月	国会図書館
松岡彦二・編	『京都明治新誌』		明治10年6月（愛媛）	京都府立総合資料館
飯田専助・編	『京都市中繁花競』		明治11年5月	京都府立総合資料館
原田興三松・編	『売買ひとり案内』		明治11年9月	『新選京都叢書』
乙葉宗兵衛・編	『西京人物誌』	村上勘兵衛	明治12年4月	『新選京都叢書』
橋本澄月・編	『京都名勝一覧図会』	風月堂	明治13年10月	京都府立総合資料館
岡本清心・編	『京都名所道案内　全』	山田　久	明治13年4月	京都府立総合資料館
遠藤茂平・編	『京都名所案内図会』（乾坤2冊）	福井源次郎	明治14年3月	京都府立総合資料館
石田有年・編	『都の魁』上、下		明治16年10月	『新選京都叢書』
久下嘉時・編	『新京極道のしおり』	布部常七	明治16年	『新選京都叢書』
文字富之助・編	『開花絵入京都見物独案内』		明治18年3月	『新選京都叢書』
文字富之助・編	『京都著名諸家案内』	片岡賢三	明治18年3月	『新選京都叢書』
松山高吉	『きやうと　名所と美術の案内』上、下巻	田中治兵衛	明治18年3月25日	京都府立総合資料館
樺井達之輔・編	『明治新版　京都名所案内記　全』	風月庄左衛門	明治20年1月10日	京都府立総合資料館
児島定七	『京都策』		明治23年4月25日	国会図書館
川勝徳次郎	『花洛名所独案内記　全』		明治24年11月（再版）	京都府立総合資料館
内藤彦一	『明治改正京都名勝便覧図会』		明治25年7月15日	京都府立総合資料館
浅井広信	『京都祇園会図会』	笹田彌兵衛	明治27年5月25日	国会図書館
京都市参事会	『京華要誌』上、下、付録		明治28年	京都府立総合資料館
The city of council of Kyoto. Nara	『The official guide-book to Kyoto and the allied prehectures』	Meisinsha	明治28年（1895）	京都府立総合資料館
志水鳩峰	『改正京都名勝図会』	風月庄左衛門	明治28年2月20日	京都府立総合資料館
安藤　清	『京けんぶつ』	山田直三郎	明治28年3月25日	京都府立総合資料館
浅井広信	『京都名所案内記』上、下巻		明治28年4月15日 （初版26年9月日）	国会図書館
柴崎徳衛	『京都旧蹟独案内』		明治28年4月1日	京都府立総合資料館

著者・編者	書　　名	出　　版	発行年月日	所　　蔵
金森直次郎・編	『京都名勝案内記　附総合府県』	飯田信文堂	明治28年４月１日	京都府立総合資料館
石田幸三郎	『京都名所独案内記』		明治28年４月１日	京都府立総合資料館
清水光憲（清水常太郎）	『京都名所独案内　全』	漫遊館	明治28年４月20日	京都府立総合資料館
山崎隆・編	『京都土産』		明治28年４月25日	京都府立総合資料館
廣池千九郎	『歴史美術名勝古跡　京都案内記』		明治28年４月26日	『新選京都叢書』
辻本治三郎・編	『京都案内都百種』	尚徳館	明治28年４月26日（三版）（初版27年７月28日）	京都府立総合資料館
平安遷都紀念祭協賛会	『京都名所手引草』	村上勘兵衛	明治28年４月５日	京都府立総合資料館
鳥越常右衛門	『京都案内』	明治28年５月	京都府立総合資料館	
森貞次郎・編	『西京名所誌』（西京名所）	春陽堂	明治28年５月１日（三版）（東京）	京都府立総合資料館
清水紫蝶（晋之助）	『京都名所図会』	笹田彌兵衛	明治28年５月３日（増補訂正再版）	京都府立総合資料館
上村長一	『京都温故誌　完』	松田庄助	明治28年５月６日	京都府立総合資料館
袖田末三郎	『漫遊独歩都名所古跡』	岡田積小館	明治28年５月18日	京都府立総合資料館
崑岡灑	『京都名所』	大淵渉	明治28年５月４日（大阪）	京都府立総合資料館
窪田修佐・編	『京都繁昌記』	青木蒿山堂	明治29年６月12日（大阪）	京都府立総合資料館
牧洞治次郎	『山科郷史』		明治30年10月17日	『新選京都叢書』
京都市尋常高等小学校長会・編	『京都郷土誌』	村上勘兵衛	明治35年７月15日	『新選京都叢書』
京都市参事会	『京都名勝記』		明治36年	国会図書館
金港堂書籍	『文芸界定期増刊博覧会紀念　夜の京阪』		明治36年（東京）	国会図書館
宮野孝吉・編	『名家訪問録』	東枝律書房	明治36年11月１日	京都府立総合資料館
黒田天外・編	『京みやげ工芸と名勝』	村上勘兵衛	明治36年３月18日	国会図書館
京都市参事会	『簡便京都案内』		明治36年３月25日	京都府立総合資料館
笹田駒治	『京都府写真帖』	村上勘兵衛	明治36年３月15日	京都府立総合資料館
京都市参事会	『京都名勝記』下巻	五車楼	明治36年４月20日	京都府立総合資料館
森　一兵	『京都新繁昌記』		明治36年５月10日	京都府立総合資料館
藤井孫六・編	『京都名勝帖』	五車楼	明治36年５月17日	京都府立総合資料館
村上文芽	『京都名所地誌』		明治37年	京都府立総合資料館
秋吉帆月	『京乃町』	五車楼	明治40年２月25日	京都府立総合資料館
京都出版協会	『二十世紀の京都　天之巻』		明治41年３月30日	京都府立総合資料館
小林籐次郎	『京都名所写真案内』	小林書店	明治41年５月10日	京都府立総合資料館
渋川柳次郎	『藪野椋十上方見物』	有楽社	明治41年６月５日	京都府立総合資料館
京都府庁	『京都府写真帖』		明治41年11月５日	京都府立総合資料館
田中市之助・編	『大日本名所図会』	東陽堂	明治43年１月20日（東京）	京都府立総合資料館
金尾種次郎	『畿内見物』京都之巻	金尾文淵堂	明治44年４月（東京）	京都府立総合資料館
村上文芽（川上文芽）	『京都名所地誌』	中村弥左衛門	明治44年４月10日（明治37年の再版）	京都府立総合資料館
京都市役所	『京都名所写真帖』		明治44年12月20日	京都府立総合資料館

これら地誌の著者についての詳細は明らかではないが，たとえば，「学士の説話を記」[13]（『京都名所独案内』明治28年）や『名所旧蹟独案内』（明治28年）の序文を書いた「文学士藤井宣正」[14]などの書物内の記述からみる限り，学者とのかかわりがみられる。また，多くの地誌が出回っていた当時の様子が，「数多都人士のものせられし傑作あれども……」[15]（『京都案内』明治28年）の記述からうかがえる。地誌がどれほど流通していたのかについて，版数から解釈すると，『花洛名所独案内記』と『明治改正京都名勝一覧図会』が再版され，『京都案内

都百種』,『西京名所誌（西京名所）』は三版にもわたる[16]。以上をみると，需要が多いのは神社，仏閣などの名所をそれぞれあげて，ひとつづつ所在や由縁が記された案内記である。

案内記は，明治以前，近世から多く存在していた。近世と明治期との大きな違いは，明治期のものには，ホテルや疎水関連施設，帝国京都博物館など明治期に建てられた数々の新施設をも名所として取り入れていること[17]，明治中期から徐々に対象となる名所の表現が，従来の版画による鳥瞰図から人の視点による写真が掲載されはじめることが，まず指摘できる[18]。従来の案内記形式を踏襲しながらも時代の変化に対応しているのである。さらに，近世までの名所案内が季節と結びついた花見や絶景といった物見遊山的なものが中心であったのに対して，明治期にはそれに加えて名所の沿革が詳述されたり，寺社の什宝を強調視することで名所の意義が内容的なものに移っていったことを新しい傾向として指摘することができる。

以下，地誌の中でも名所についての説明という共通テーマを持ち合わせた案内記を中心に，書き出された「京都」を確認していきたい。「美術」という言葉はこれらの名所案内の記述のなかにみいだせるからである。

もともと名所や旧蹟の説明を目的とする案内記に，以前にはみられなかった「美術」の記述が一般的にあらわれるのは明治28年の出版物においてである。では，案内記に記されるところの「美術」とはいったい何を指しているのであろうか[19]。以下の引用部分は全て，その内容に対する著者の意図が最もあらわされる緒言や総記から引いたものである。したがって，ここでの「美術」に注目することで，その具体的な内容がわかる。

◎明治28年

1．「西京は土地優美にして，人民美術に富み，手芸製作の業に長ず，今回の博覧会が将博覧会が将来の利益をこの地に与え……」『西京名所誌』

この時点で京都の人々が「手芸製作の業」に長じていて，そして博覧会がその人々にとって有効なものとなるであろうとし，「美術」という語が，いわゆる手工芸を指すと考えられる「手芸製作」と結びつけて語られていることがわかる。つまり，この場合の「美術」は同時代の陶芸や染織といった工芸を意味していたと考えてよいだろう。

2．「帝国美術の中心は京都を除きて看出す能はざるなり」『京都名所図会』。また，同じく総論にまとめられた「京都の美術」には，「秀麗なる山川と艶膽なる花辨とは識に其容を変じて造花の妙を報じ過去千有余年の長歴史は我国風の変遷を写し出して人類百般の状態を露はし加ふるに……京都人士豈に焉ぞ其の感化を受けざらんや彼等の官能は既に其幼少の時に於て美という一種の刺激に感染せられ審美的思想は殆どの天性と成て深くその心裏に宿る是に

於て乎彼等が一たび其敏腕に振るわすや変じては絵画となり溢れては彫刻となり織物となり陶器となり漆器となりて艶妍互いに競い芳香相争う宜なる哉」とある。

京都の人々の美に対する感覚は，幼少のころから周りに存在する自然と過去の千百余年の歴史によって育まれ，その感覚の表現が，絵画，彫刻，織物，陶器，漆器となるといわれる。また，互いに競いあってよくなるということは，これらの京都の人々にとって表現された「美術」は同時代の絵画，彫刻，織物，陶器，漆器であると考えられる。それは，「近来海外へ輸出するもの又尠なからず……美術の精巧を究め内外人の喝采を博す……（西陣より）」[20]での「美術」も同時代につくり出されている織物であることがわかる。

3．「著名の美術品を蔵するところ」『歴史美術名勝古跡　京都案内記』として，特にあげられているのは，東寺，西本願寺，東福寺，知恩院，大徳寺，醍醐寺である。これらの項目をみると，例えば，大徳寺では，「天井の龍の画は長谷川等伯筆，十六羅漢木像は皆傑作，仏殿初赤松則村父子の昨，庭は小堀遠州の昨，塔頭聚光庵に千利休墓あり，著名の画幅甚多く（五百羅漢百幅，龍虎双幅，牧谿の中観音左右猿鶴の三幅封，大燈国師像）」[21]があげられる。

また，知恩院では，「方丈は金障皆狩野一門の筆に成り，杉戸の画，左甚五郎の作の鶯張，最も画幅に富む（土佐吉光其の門下の筆に成り法然上人行状絵伝四十八巻，玄宗帝筆の屏風）」[22]とある。

これらから，ここでいわれる美術品とは，寺の建築，書院，庭から古筆，書画，屏風，絵巻，文書，仏具といった什宝，つまり古美術を指すと考えられる。

4．「書画の著名なるを掲ぐるは美術を好む人に紹介せんが為なり」『京都名所』では，少なくとも「美術」は書画をあらわすものである。そして，「方丈の各間にはいづれも有名の筆をして世に伝称せらる宝物も数多き……（南禅寺より）」[23]とある。そのなかには，徽宗皇帝の墨画の山水，足利義持の十六羅漢があげられている。また，「此寺に宝蔵する古書画類多きが中にも兆殿司の筆せる堅三丈九尺横二丈六尺の大涅槃の像……（東福寺より）」[24]そして，「憲宗皇帝より空海に賜りし山水の屏風及び金岡の筆十二天像の屏風は絶大の奇品……（東寺より）」[25]などからも，ここでいう書画とは寺の什宝，つまり古美術であることがわかる。

5．「景勝と美術とは実に京都の特有なり」，「本邦の美術宝器を見んと欲せば必ず轅を京都に向けざるべからず」『きやうと　名所と美術の案内』でいわれるところの「美術」は，寺の什宝，すなわち古美術を指す。それは，「京都の名勝と美術とを弘く世にあらわすを以て目

的とすれば名勝を案内とすると共に梵刹神祠等に蔵するところの什宝を紹介」という前提が凡例で示されていることや，「什宝美術の年代」やその作者の伝記などを紹介する「美術の栞」という付録からわかる。

6．「京都の美術の沿源を探る」『京都名所案内記』に関しては，各項目の内容記述が神社，仏閣の簡単な沿革のみのため，15明治28年以前の案内記と比べて何ら変わりない。それには，本来この書が発行されたのは明治26年のことであり，それが同28年に改題発行されているため，緒言のみ改めたことが予想されうる。おそらく，改題発行にあたって「美術」という言葉を付け加えたと思われる。このことは，案内記で「美術」の言葉は，付け加えるだけの新しい価値があることが示される[26]。

以上，3から5までの案内記に示されるところの「美術」とは，概ね寺の什宝であるが，1と2に関しては同時代の殖産興業のための工芸品にも及んでいることがわかる。明治28年以降，3から5の什宝が「美術」として主流になっていくが，1と2でいう「美術」，つまり殖産興業のための工芸品については，すでに明治28年以前に京都にとっての重要性として指摘されていた。それは，明治23年，児島定七によって書かれた『京都策』[27]という京都の今後を考える論文として出版されたものにみられる。

まず，『京都策』が書かれた背景には，京都の不況対策があった。不況の様子は，明治初期より殖産興業を目的に行われた京都博覧会の統計を載せた『京都博覧会沿革誌』[28]でも確認できる。これに対して，児島は『京都策』において，国レベルの博覧会を東京でのみ行うことは，地方の不景気の救護策にはならないという国家の一局集中型への批判を示し，内国勧業博覧会の京都誘致を主張した。

こうした背景をふまえて『京都策』は，「将来に於ける我が京都維持の方策」[29]を目的として書かれた論文である。そのなかで，京都の今後の発展に特に必要なものとして児島は次の三つの項目をあげている。一つは「名所保存」，二つ目は「旅客吸集」，そして三つ目は「工芸美術」である。このなかで児島は「工芸美術」と「美術工芸」の違いは，「工芸美術」は産業（商売）であり，「美術工芸」は産業を支える物産（売り物）を指すという。この「美術工芸」が1と2での殖産興業のための工芸品にあたるのである。

明治23年の『京都策』では，産業，物産として認識されていた「美術工芸」が，明治28年の『平安通志』では，「物産」，「美術工芸」，「宝物」に区分されている。そこでは，「物産」とは，「西陣織物・染物・友禅染・糸組物・綵緞・陶器・粟田焼・漆器・銅器及金属器類・鑄鐵物・七宝焼・刺繍・扇・團扇・金箔・翫弄品・度量衡・指物細工・竹細工・錫細工・鉛粉・臙脂・墨・筆・薫香・色紙短冊・祇園香煎・砥石・針・弓箭・馬具・楽器・冠服・法衣・

丹後縮緬・山城製茶」[30] があげられ，同時代に生みだされる「一般産物」として扱われる。

一方で，「美術工芸」では，「絵画（仏画・絵巻物・墨画・障壁・玩章）・書・織物・陶器・漆髹・冶金・友禅染・刺繍・金絲平金繍・彫刻・園芸・建築[31]，そして「寶物」には「絵画・文書・仏像並に彫刻物」[32] があげられ，代々藤原氏，足利氏，豊太閤，徳川氏などの権力と作家との結びつきという歴史的な時代背景が書き綴られる。つまり，「美術工芸」とは伝統性を強調したものであるといえる。この「美術工芸」のなかの友禅染や陶器，刺繍が「物産」の内容と重なるのは，『平安通志』において「美術工芸」には同時代の産業性より伝統性を強調するという差異が与えられていると解釈できる。

そして，「宝物」にあげられたものが「全国臨時宝物取調局鑑査状」や「美術品ノ目録」を参考に記載されたということは，いいかえれば，神社，仏閣の什宝が美術品であると考えられる。それには，「寺院中西本願寺ノ如キ，美術名品甚多シ」と記されていることからもわかる[33]。

こうして『平安通志』で示される内容からは「美術工芸」が，「物産」にも「宝物」にもかかわるといえる。明治23年の『京都策』においては「美術工芸」，「物産」，「宝物」の名に分けられたが，実質的にはそれぞれの連鎖がみられるのである。ふりかえると，明治28年での案内記に出てくる「美術」とは，「美術工芸」，「宝物」の両方を含んで指していた。しかし，これ以降，次第に「美術工芸」と「宝物」すなわち「美術」の領域が明確化されることになる。

◎明治36年

7．「美術品展覧会を開き各種の古代装飾十数室を設け」『簡便京都案内』

「京都に於る諸大会」という案内において，京都帝室博物館の「時代品陳列」という催しが告知されている[34]。これにあたって，京都帝室博物館は三つの分類を行っている。それは，「歴史」「美術」「美術工芸」である。まず，「歴史」とは古文書であった。「美術工芸」と「美術」の区分は，前者が金工，漆工，陶工，職工などの製品であるとされる。また，これらの製品には沿革が示されたとある。製品に歴史的な沿革が示されるということは，「物産」というより伝統性を重視する工芸品を意味するといえる。一方，「美術」とは，「物産」でも「美術工芸」でもない神社，仏閣の什宝を指すことが明確にされるのである。

◎明治44年

8．「あらゆる美術品，工芸品は京都に於て製せられ……智巧にして美術の思考に富む」『京都名所地誌』

これは，本編の一部である「総記」においての記述である。この書のなかは寺社に関する記事が多く，ここで示される「美術」とは，「海北友雪筆天井扇面図，絵馬は狩野秀信筆……（西本願寺菊の間より）」[35] あるいは，「狩野隆也の山水，襖は土佐光興の筆，（銀閣寺仏殿西の間より）」[36] などの寺院の従属物であり，「美術工芸」，つまり歴史ある物産に関連した意味での「美術」の記述ではない。

上記のように，案内記において明治28年に出版した「美術」の内容は，次第に神社，仏閣の什宝への意味合いに絞られていく。

案内記は，明治28年に出版が相次いでいる。これは，当然この年に行われた第四回内国勧業博覧会と平安遷都千百年紀念祭の成功を導くためである。明治28年に出版された案内記を見ると，たとえば，「第四回内国博を開設するに際し，諸国の旅客必市郡の名勝古蹟を見る者多い」[37]『改正京都名勝図会』，あるいは「千有余年の旧帝都山紫水明の麗美を以て艶稱せらるる京都，今や奠都祭挙行と大博覧会開設とに由り，内外国人士潮の如く来都す」[38]『京都温故誌』に書かれているように，イベントを利用してたくさんの観光客を呼び寄せることが「京都」興しにつながるという意識が強く働いていたとみえる。それには，次の案内記の出版ラッシュが明治36年であり，この年は第五回内国勧業博覧会が大阪で行われたためであることにも納得できる[39]。これらからうかがえるように，大阪での博覧会に付随して京都にも観光客が押し寄せることが期待されていたのである。

東京遷都後，得意先であった御所が東京へ移って以降，町の経済流通を支えてきたのは他ならぬ他府県からの観光客であった。京都は，明治当初より近代化に専念して復興を試みてきたわけであるが，明治中期には集客による活性化のために，改めて京都の主な名所，旧蹟である神社，仏閣の什宝に着目する動きがみられる。そのため，案内記中において積極的な展覧告知もみられる[40]。このように，観光客を呼び寄せる手段として神社，仏閣の什宝，すなわち「美術」が注目されたのである。

以上をまとめると，京都のことが書かれる地誌のなか，内容，量ともに最も書き手の「京都」に対する表現があらわれるものが案内記であった。これらの案内記は，特に明治28年に多く出版された。その理由は，第四回内国勧業博覧会と平安遷都千百年紀念祭に来る全国の観光客に「京都」を魅せるためであった。明治28年以降，案内記において「美術」という言葉が出現したのは，京都への観光客動員を意識される新しい手段であった。それは，『京都名所案内記』において明治28年の再版の際の緒言のみに「美術」という言葉が付け加えられたことに物語られている。

名所案内の記述に「美術」が入り込んだことは新しいことであった。案内記において新しい

言葉である「美術」とは何を指したかというと，それは二つに分けられた。ひとつは，「京都」の産業発展のための同時代の工芸品，そして，もうひとつは神社，仏閣の什宝であった。

まず，同時代の工芸品は，明治23年から『京都策』による「美術工芸」としてすでに認識されていた。その内容が，明治28年の『平安通志』では，「物産」「美術工芸」「宝物」として分けられたが，それらは相互に関連しあうものであった。つまり，これらの内容を完全に分離して扱われたわけではなく，あいまいであった。それが，明治36年『簡便京都案内』では，「美術工芸」は伝統を重視する製品であるとし，「美術」は什宝であると明確化される。そして，明治44年『京都名所地誌』において，完全に「美術」の内容が神社，仏閣の什宝になる。

明治28年以降の案内記では，近世の名所図会におけるように従来，神社，仏閣の什宝として扱われていたものを「美術」として捉えるようになる。神社，仏閣に従属し宗教的価値をもつ什宝から普遍的価値をもつ「美術」へと転化させ，それから構成される「京都」として一般大衆へ発信させようとする意識があるといえる。

3　「美術」は歴史の具現化

京都は，794年に桓武天皇（737～806）による平安遷都が行われて以降，永く日本の中心地であったが，幕末の政変で町は荒れ，1864年，ついにどんどん焼けとよばれる大火災が，京都の大半を焼き払った。戦乱と不安定な政情が続いた後，1869年にはついに東京遷都が行われ，それに伴い公家，商人たちも東京へ移るものが多く，その後，京都は一地方都市化として衰えていく。

明治当初，京都博覧会の開催や数々の工場施設において京都の活性化が試みられた。しかし，それらの手段による京都の活性化にも限界が訪れ，度重なる不況の中，新たな一歩を踏み出すことの必要性が叫ばれた。そして，「京都」は歴史による演出で復活をかけた。

つまり，明治維新で衰えた「京都」という都市にとって，千年以上も都として続いた歴史を伝えることが復活の方法であったのである。平安以来の長い年月の出来事が史実に基づき編纂されることで京都の歴史がはじめて生まれた。そして，過去をたたえる紀念祭の催しの決定が，全国レベルでの博覧会の京都誘致の成功を導いたのである。

博覧会開催によって伝統産業である「美術工芸」や「物産」の活性化，また，全国各地から来る観光客による商業の活性化が目指された。この博覧会誘致と観光客動員のための演出として歴史性が強調されたといえる。博覧会の成功後，京都に来る観光客がみた歴史性とは，まず紀念祭にあたって建立された平安神宮である[41]。そして，平安時代から明治維新にいたるまでの風俗や文物を行列でみせる時代行列，これは後に時代祭として祭礼化されるが，こうして歴史を視覚化することによってできあがったのが歴史都市「京都」であったと考えられる。

そして，なにより歴史の証明となったのが神社，仏閣の什宝，つまり「美術」の品々であった。神社，仏閣に従属する什宝から普遍的価値をもつ「美術」に読み換えることにより，京都の伝統が日本の歴史に置き換えられることになる。この過程において必要となるのが九鬼隆一の主張である。

九鬼は，文部省の役人であり，岡倉天心とともに帝国博物館の成立に重要な人物であった。また，九鬼は岡倉の「日本美術史」による美術における歴史区分を京都で広め[41]，その美術および美術史についての大意が『京都美術協会雑誌』で紹介されている。

そのなかで具体的な「美術」として「佛寺ノ建築佛像佛画ノ技巧」を具体的にあげ，「我国ノ美術ハ毎ニ宗教ノ変遷ト共ニ推移シ精神上ニ力強キ感化ヲ受クルモノナルコト」と捉えている[43]。つまり，宗教という精神性から創造された建築や彫刻，絵画を「美術」という。このような九鬼の指す「美術」は主として神社や仏閣の什宝として存在するが，この「美術」認識の背景にはフェノロサや岡倉による宝物調査が働いたといえる。なぜなら，明治21年4月27日付の『日出新聞』に「日本の美術」が報じられているが，そこには，「日本の美術は何処に在るやと尋ぬるに，……其美術品の大半は昔より寺塔社祠などに在るもの多く……」とある。調査に同行し，その詳細を報じていた金子静枝によるこの記事からは，フェノロサ，岡倉，九鬼が「美術」を神社，仏閣の什宝に求めていた様子が明らかとなるからである。

また，「美術ガ時代精神ヲ代表スル」[44]という九鬼の意見は，「美術」が歴史の視覚化となる背景になる。そこで，美術にとって大切なのは形式ではなく，社会の情勢に導かれるところの意味の表現であるといわれている。こうして過去の美術をみることで当時の時代精神がわかるというのである。これにより，「美術」が歴史をあらわすものとして意味づけられる。それは，いいかえると「歴史」そのものは「美術」によって表されるということなのである。このようにして岡倉の時代区分や九鬼の主張に支えられ，歴史の証明となったのが神社，仏閣の什宝，つまり「美術」ということになる。

近世以来，京都の案内記にとりあげられてきた京都の名所というテーマにおいて，神社，仏閣のもつ什宝であったものが，明治28年以降では歴史の視覚化となる「美術」として新たな展開をみせると同時に，明治期において名所に対する沿革，つまり歴史の充実が次第に要求されるようになった。

「名所といふは建築等の美麗又は景色絶佳等のみにて名所とは曰はず歴史上に関係有り故実の慕しき旧蹟と為りてこそ真に名所と謂うはるるなり」[45]（『京都名所独案内』明治28年）

名所とは単に対象の美しさだけではなく，その対象がもつ歴史背景があってこそ，はじめて成り立つと定義されている。そして，名所において歴史を視覚化できるものが「美術」となる。それには，案内記のなかで神社，仏閣の什宝，つまり「美術」が，製作された時代そのものを

表すものとして機能することにより，従来の花見や物見の場であった名所に対し，歴史性といった中身が重視されるようになったのである。

歴史背景の重要性が示される以前より，従来の案内図会の影響で花見や物見の場として名所，旧蹟に観光客が押し寄せることはあったであろう。しかし，それに「京都」の独自性，つまり往年の都であったからこそ，見どころとして成立する「美術」を宣伝することは，従来の名所，旧蹟へのさらなる集客手段として新たな意味を付け加えたといえる。

明治28年以降の案内記において，神社，仏閣の什宝の「美術化」が観光客に働きかけることによって，歴史都市「京都」というイメージは，京都に存在するそれぞれの名所，旧蹟の「美術」を通してみえる歴史によって，形成されていったと考えられる。

おわりに

明治28年に多くの京都の名所案内記が出版された。その理由は，第四回内国勧業博覧会と平安遷都千百年紀念祭に来る観光客に「京都」をみせるためであった。このみせ方の演出として，平安以来の歴史性が強調された。それは，紀念祭という平安京を興した桓武天皇をたたえた催しや，平安京をならって創られた平安神宮であったり，それまでなかった体系的な京都の歴史書である『平安通志』ができ，また，時代行列が行われたことで歴史が視覚化されたことによる。そうして演出された歴史性を証明するものが，京都に多数存在する神社，仏閣がもつ美術品であった。

明治28年をきっかけに神社，仏閣の従属物である什宝であったものが，普遍的な価値をもつ「美術」に置き換えられたのである。そして，かつて都として栄えていた京都であるからこそ創られた「美術」が岡倉天心や九鬼隆一の思想を背景に歴史の証明品となったのである。

このように什宝が美術化することは，案内記を通して確認できるのである。全国からの観光客は，案内記において「美術」という新たな意味をもった名所を見ることで，歴史をくみ取るのである。つまり，「美術」が媒体になることで，歴史都市「京都」が一般化し流布することが促される。したがって，「美術」は，現代にも続く歴史都市「京都」としてのイメージを形成した大きな要因であるといえるのである。

本稿は，意匠学会第166回例会（2001年２月10日　於：京都女子大学）での発表に基づくものである。

註

1）本文中において，都市の名称という意味だけではなく，近代になり伝統の町として意図的に創造され

た京都に対して括弧を用いる。

2）現代の「京都」イメージとは一般的にどういうものなのかを知るために，「京都」イメージに関するアンケート用紙を作成し，街頭アンケートを行った。これにより2000年12月22日から24日の期間，場所は都内３カ所（東京駅構内，渋谷，恵比寿）において男性67名，女性56名の合計123名の回答が得られた。回答者の年齢は，10代が14%，20代が60%，30代以上60代までが26%で，20代が中心である。また，回答者の出身地は，北海道・東北が８%，関東が64%，北陸２%，中部９%，近畿７%，中国・四国６%，九州２%，外国２%から関東出身者が大半であった。

3）主な質問内容は，あらかじめ用意された具体的な言葉から回答者が，どれだけ「京都」をイメージすることができるか四者択一（選択肢は程度別）のものと，回答者自身が「京都」ときいて何をイメージするのかを自由記述してもらうものとした。なお，それぞれの言葉については，古代から現代へと続く時間軸と文化系から科学系へと続く領域軸を設定し，この二元軸上にあたる言葉を選びだした。それぞれの言葉によって得られた結果は，主に三つの部分に分けられる。ひとつは，とても「京都」をイメージできる「神社・仏閣」，「歴史」，「観光」，「伝統」の言葉群である。つぎに，「京都」をあまりイメージできない言葉群としての「近代」，「流行」，「産業」，「人工」，「工業」，「科学」である。そして，その中間に位置するのが「工芸」，「美術」，「国際性」，「自然」となった。ごく簡単な調査ではあるが，このことから「京都」をイメージしやすい言葉が古代系かつ文化系に偏り，そして，逆にイメージしにくいのは現代系かつ科学系の言葉に偏ることがわかる。さらに，自由記述から得られた回答は，「寺・神社」，「歴史」，「食べ物」，「町並み」，「舞妓・芸妓」，「伝統的」の順に占めた。この結果が示すように，現代の私たちの「京都」イメージとは歴史と古社寺の町として，なかば一般化されているといえる。

4）小林丈広『明治維新と京都 ── 公家社会の解体 ──』臨川書店　2000
高木博志「京都のイメージはどのようにしてつくられたか ── 平安文化論の成立」同志社大学人文科学研究所ブックレット No. 12

5）本稿で用いる「美術」とは，全て案内記の中で扱われる内容を指す。

6）内国勧業博覧会は，明治10年に第一回，同14年に第二回，同23年に第三回が，いずれも東京上野を会場に行われていた。

7）京都市参事会編『平安通志』新人物往来社　1977（明治28年に出版されたものの復刻版）

8）小林丈広『明治維新と京都 ── 公家社会の解体 ──』臨川書店　2000　p. 186

9）京都市参事会編『平安通志』新人物往来社　1977　pp. 747-749

10）高木博志「京都のイメージはどのようにしてつくられたか ── 平安文化論の成立」同志社大学人文科学研究所ブックレット No. 12

11）明治28年10月23日付の日出新聞に，平安遷都千百年紀念祭式典において『平安通志』は祭主幣物に続いて神前に奉られたと記されている。

12）表形式や和歌形式，画集形式など様々な形式を含むが，京都案内という共通テーマで年を追って出版されているため，時期的，あるいは内容的にその変化がわかりやすい。

13）清水光憲（清水常太郎）『京都名所独案内　全』漫遊館　明治28年　p. 2

14）柴崎徳衛『名所旧蹟独案内』　明治28年　p. 4

15）鳥越常右衛門『京都案内』　明治28年（編者しるす）

16）表１参照

17）例えば，常磐ホテル（現京都ホテル）は，西洋語に対応する宿屋として『明治改正京都名勝便覧図会』（内藤彦一　明治25年　p. 86）に掲載されている。疎水関連施設は，機械場が『明治改正京都名勝便覧図会』（内藤彦一　明治25年　p. 84），インクラインは『改正京都名所図会』（志水鳩峰　明治28年　p. 33）にそれぞれ掲載されている。帝国京都博物館にいたっては，『京都名所』（崑岡灑　明治28年）において，開館前にもかかわらず名所として記載されている。

18）『京都名勝案内記　附総合府県』（金森直次郎編　飯田信文堂　明治28年）や，『京都名勝記』（京都

市参事会編　五車樓書店　明治36年）において新しい表現技術として写真が用いられはじめる様子が見てとれる。

19）案内記中の緒言，総記に記される「美術」は以下の通り。
　1．森貞次郎編『西京名所誌』春陽堂　明治28年
　2．清水紫蝶（晋之助）『京都名所図会』笹田彌兵衛　明治28年
　3．廣池千九郎『歴史美術名勝古跡　京都案内記』明治28年
　4．崑岡灑『京都名所』大淵渉　明治28年
　5．松山高吉『きやうと　名所と美術の案内』田中治兵衛　明治28年
　6．浅井広信『京都名所案内記』明治28年
　7．京都市参事会『簡便京都案内』　明治36年
　8．村上文芽（川上文芽）『京都名所地誌』中村弥左衛門　明治44年

20）清水紫蝶（晋之助）『京都名所図会』笹田彌兵衛　明治28年　p. 8

21）廣池千九郎『歴史美術名勝古跡　京都案内記』　明治28年　pp. 33-34

22）廣池千九郎　前掲書　p. 24

23）崑岡灑『京都名所』大淵渉　明治28年　p. 19

24）崑岡灑　前掲書　p. 45

25）崑岡灑　前掲書　p. 57

26）ただ，現時点では明治26年版の所在は不明である。

27）児島定七『京都策』　明治23年

28）京都博覧協会『京都博覧会沿革誌』明治36年　京都博覧会は，京都市民によって運営されており，政府主催の内国勧業博覧会とは規模を異にする。

29）児島定七『京都策』明治23年　p. 1

30）京都市参事会編『平安通志』新人物往来社　1977　pp. 444-451

31）京都市参事会編　前掲書　pp. 451-498

32）京都市参事会編　前掲書　pp. 498-549

33）京都市参事会編　前掲書　p. 498

34）京都市参事会『簡便京都案内』明治36年　pp. 22-23

35）村上文芽（川上文芽）『京都名所地誌』中村弥左衛門　明治44年　p. 186

36）村上文芽　前掲書　p. 119

37）志水鳩峰『改正京都名勝図会』風月庄左衛門　明治28年

38）上村長一『京都温故誌　完』笹田彌兵衛　明治28年

39）「第五回内国勧業博覧会は……大阪市に開催せらる……我京都の地たる大阪市と距ると僅に十三里……大阪市に集合せし幾百万の人士は必らずや交通の便利により瞬間に我が京都市に入りて此楽土に逍遥し其風光を鑑賞せんと欲するなるべし」（『簡便京都案内』より）

40）宝物殿堂等常に拝観を許さる（智恩院）」，「四月一日より五月三十日まで宝物展覧あり（大徳寺）」，「博覧会会期中殿堂宝物拝観を許さる（黄檗万福寺）」（『簡便京都案内』より）

41）平安神宮は，明治28年の平安遷都千百年紀念祭にちなんで，第四回内国勧業博覧会会場の近隣に建立された。

42）高木博志「京都のイメージはどのようにしてつくられたか ── 平安文化論の成立」同志社大学人文科学研究所ブックレット No. 12

43）『京都美術協会雑誌』第18号（明治26年11月28日）　p. 4

44）『京都美術協会雑誌』第37号（明治28年６月28日）　p. 4

45）清水光憲（清水常太郎）『京都名所独案内』明治28年　pp. 2-3